

## 文学研究と私

松本 陽正

この三月に定年退職いたしました。広島大学フランス文学研究会での講演は退職前から依頼されていました。原野昇先生ご退職後、十年間、講師をさがし、研究会での講演をお願いする立場にあった以上、そしてまたその苦労がわかっている以上、お断りするわけにもいかずお引き受けいたしました。

当初は、退職後に新たにやり始めるテーマについてお話しするつもりでした。しかしながら、理由はあとで述べますが、そのテーマは、結局、断念いたしました。講演のネタがなくなってしまったわけですが、それでも何か喋らなくてはなりません。そこで、本来なら最終講義ですのような話でお茶を濁させていただくことにいたしました。

いわゆる最終講義は行いませんでした。「面映い」、「迷惑をかける」といったことも理由といえ理由ですが、何よりも、退職前の三年間、授業によっては<最終講義>として臨んできたからです。たとえば「フランス文学史」は三年に分けて文学史を講じていますので、一例をあげますと「ラシーヌについて人前で一時間半も喋るのはこれが最後だねえ」と思いながら教壇に立ってきました。「フランス文学史」については過去三年、毎回がある意味<最終講義>でした。

そういうわけで最終講義はしませんでした。ただ、今回せつかく機会を提供していただきましたのに、考えていたネタが使えなくなりましたので、「文学研究と私」というタイトルで、私の文学研究とのかかわりについて今までの総括をさせていただこうかと思うようになりました。もし時間が余れば、現在と未来についてもお話しし、再出発の機会としたいと思っています。いわば自己の過去の追想が中心でして、面白みに欠ける話かと思いますが、もしもお役にたつところがあるとしたら、多少、自慢たらしく聞こえる部分、そしてそこで私がとった行動かと思っています。そんな話です。

あとで触れます『「異邦人」研究』（広島大学出版会）の「あとがき」に詳しく書きましたが、私は1969年広島大学文学部史学科東洋史学専攻に入学し、二年次から文学部フランス語学フランス文学専攻に転学科いたしました。研究対象はアルベール・カミュに決めていました。卒論の題目は『「異邦人」論』、修論のそれは「アルベール・カミュ研究 — <追放>のテーマを中心に —」でした。お手元の資料

をご覧ください。これは『広島大学フランス文学研究』34号に掲載されている私の「主要著作目録」の写しですが、博士課程に進学後は、カミュを中心にささやかな仕事をしてきました。

とにかく最初はカミュ作品で思いつくテーマについて書いてきました。そんな中で、〈記念碑〉と言ってはオーバーですが、私にとっていろいろな意味で意義深い仕事となったのが、学会誌に掲載された「*Sur l'honneur chez Camus—nouvelle valeur dans L'État de Siège*」(1992)です。これは、「カミュにおける名誉について—『戒厳令』における新たな価値観」と題し、1991年に学会発表したものです。カミュにおける名誉は、今思うと当然問題にすべき重要なテーマですが、当時としては斬新なテーマでした。

1975年か1976年頃でしたか、「アルフレッド・ド・ヴィニーにおける名誉の感情」という題目でフランスで学位を取られた田中隆二先生のお話を、杉山毅先生の研究室で伺ったことがあります。「カミュにおける名誉について」という着想には、この時の体験が脳裏のどこかにあったのかもしれませんが、どこに思考のヒントが隠されているか、わかったものではありません。

話が少しそれましたが、この学会発表と学会誌への掲載によって大きな二つのことを得ました。一つは、権威ある学会で発表する必要性とその意義、です。地方にとどまり、地方の研究会で発表したり、地方大学の紀要に論文を掲載したりするだけでは、全国にちらばっている専門家に聞いてもらったり、読んでもらったりする機会はあまりないでしょう。全国大会での発表をとおして、当時誰も認めるオーソリティともいえる先生や、今では著名な知識人となった同世代の研究者から手紙を頂戴し、知遇を得ましたし、その他にも多くの方々と知り合いになりました。

二つ目は、研究成果を欧文で発信する必要性、です。当たり前のことですが、フランス語で書かないと、フランス人には読んでもらえません。2001年から2002年にかけてパリに留学したとき、名誉に関するこの論考の抜き刷りを何人かのカミュ研究者に手渡したのですが、どなたが評価し掲載してくれたのかは不明ですが、2008年に出た新プレイヤッド版の『戒厳令』の「参考文献一覧」三点の内の一つにこの論文があげられており、初めてそれを目にしたときは私自身びっくりいたしました。

こんなふう思いつくまま発表したり、書いたりしてきましたが、比較的早い時期から、まとめるつもりで発信したのが、『最初の人間』に関する一連の論考です。ご承知のように『最初の人間』は、1960年1月4日に交通事故死したカミュが鞆の中に所持していた144枚の未完の小説の草稿なのですが、1970年代半ばの修士論文作成の頃からその存在が気にかかっていた。旧プレイヤッド版の編者ロジェ・

キーヨ、カミュの師にして友人のジャン・グルニエ、浩瀚なカミュ伝を著したロットマンらの言及を追い、いろいろと想像しておりました。ただ、『最初の人間』を目にしてわかったことですが、いずれも読んでいたとは言い難いと思います。ジャン・グルニエは、カミュ作品の「遺作管理委員会」のメンバーですが、グルニエにしても実際には読んでいなかったようです。

1992年でしたでしょうか、『最初の人間』がそろそろ出るという情報をカミュ研究会で得、待ちかまえるようになりました。1994年4月13日、ついに出版されました。5月27日、学会の春季大会に出席のために上京したとき、新宿のフランス図書に飛んでいきました。田舎者なんですね。フランス図書に行けば、山積み状態になっていると思い込んでいたのですから。ところが、売り切れで、在庫はありません。当時フランス図書に勤めていた先輩の話によると、「100冊仕入れたが、瞬く間になくなった」とのことでした。一応、注文だけはして帰広しましたが、がっかりです。その話を原野先生にいたしますと、すでに購入済みの『最初の人間』を翌日には譲ってくださいました。カミュ専門家の端くれだというのにカミュの話題作すらすぐに入手できず、中世がご専門の方に譲っていただくとは…… 実に情けない話なのですが、そんなことはすぐに忘れ、『最初の人間』と向き合っ、その夏に論文としてまとめてみました。日本で最初の『最初の人間』論となったわけです（「カミュの *Le Premier Homme* について」、『広島大学文学部紀要』54巻、1994年12月）。

内田樹氏は、レフリーの点数ばかり気にする若手研究者の学会発表に「知的な高揚感を覚える」ことがなくなったし、学会発表で「生き生きとした研究」発表がなされなくなったと苦言を呈されていますが（『最終講義』、技術評論社）、作品を研究する際、研究対象に強く心を動かされることが、バックボーンとして必要かと思えます。共感、反発、大なる疑問、賛嘆の念、何でもいいと思えますが、作品に触れた際に覚えた強烈な感情に、つまり自己の切実な内的動機に裏打ちされていないと、文学研究は「生き生きとした」ものにはなりません。昨今、書けそうだからという理由で対象に向う傾向が見られますが、書けそうだから書くのではなく、書きたいから書くのでなくてははいけません。

少しそれましたが、ご存知のように、『最初の人間』は自伝的な作品です。もちろんそこには虚構の操作もほどこされてはいますが、リセの途中までのカミュの生涯の再現と言ってもいい側面が容易に見てとれる小説です。頼るべき価値観を持ち合わせず、生きる支えとなるものを独力で創り出していかなくてはならなかった＜最初の人間＞たる主人公の歩みは、私自身の心に密着するテーマでもあり、胸に迫ってくるものがありました。書物とはまったく無縁な貧者の世界から知の世界へと飛

び出していく主人公の軌跡は、比ぶべくもありませんが、18歳で故郷の田舎を出、大学という知の世界、書物の世界へと進み、少年時代を過ごした故郷や家から結果的に「逃げた」ことになった私自身の体験と重なる部分があり、ふかい感動を覚えながら読み進めることができました。

その後は、すでにお話しいたしましたように『最初の人間』を中心に発表し、それらをまとめる形で、1997年10月に『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme* 研究』と題する博士論文を提出し、1999年2月、同論文を駿河台出版社より上梓いたしました。

2001年9月から2002年6月までは、当時はマルヌ＝ラ＝ヴァレ大学に在職中のジャンヌ・ゲラン氏に客員研究員として受け入れていただき、文部科学省在外研究員として渡仏いたしました。原野先生にはご迷惑をおかけいたしました。いろいろと貴重な体験をさせていただきました。その点については報告したことがありますので（「カミュ研究の現況」、『広島大学フランス文学研究』21号）、ここではフランスで行った研究発表と発信とに限定してお話ししたいと思います。マルヌ＝ラ＝ヴァレ大学では、ゲランさんを中心とした研究会に参加しました。月一回もない研究会でしたが、一人の持ち時間は、発表時間一時間、質疑応答一時間、合計二時間というかなりハードなものでした。その研究会で、博士論文の一部を使って二回発表いたしました（「*Le Premier Homme : le processus d'élaboration*」ならびに「*L'Ombre portée par Le Premier Homme sur L'Exil et le royaume*」）。発表原稿は、マルヌ＝ラ＝ヴァレ大学の研究会誌に掲載の内諾をいただいていたのですが、三野博司氏に誘われ夕食を共にしたレイモン・ゲ＝クロジエ氏に投稿してみました。ゲ＝クロジエ氏は、当時、最も権威ある雑誌『アルベール・カミュ』の編集責任者でしたが、『アルベール・カミュ』の次号の特集は『最初の人間』だとの情報を得ていたからです。結果的には、運良く二編とも『最初の人間』特集号に掲載されました（*Albert Camus 20, Lettres Modernes Minard, 2004*）。運のいいことが、さらに重なりました。『アルベール・カミュ』は、カミュ研究者なら誰でも必ず目を通す雑誌なのですが、『最初の人間』の形成過程に関する論考が、2008年に出た新プレイヤッド版の『最初の人間』の「作品解題」（「*Notice*」）の中で、カミュ学会会長のアニェス・スピケル女史によって取りあげられ、詳しく紹介されたのです。なお、これら二本の論文は『最初の人間』の「参考文献一覧」の中でも言及されています。

それにしても、ゲランさんは寛大な方です。『アルベール・カミュ』20号に投稿し、採択されたことを詫びますと、「（マルヌ＝ラ＝ヴァレ大学の研究会誌よりも）ゲ＝クロジエの方がええ」と言って、了解してくれました。そればかりか、ゲラン

さんが編集を務めた『カミュ事典』にも声をかけてくださり、複数の項目を担当させてくれました (*Dictionnaire Albert Camus*, Robert Laffont, 2009)。

帰国後の最初の仕事は、文学作品に見られる〈仮面〉〈偽善〉〈分身〉といったテーマを追い、『心の二重性』というタイトルで上梓したことでしょうか (溪水社、2003年)。もっともこのテーマは、帰国後に思いついたものではありません。十数年前、1987年3月に『中国新聞』の「緑地帯」のコーナーに八回にわたって連載したものが、ベースになっています。

『最初の人間』に惹かれた理由についてはお話しいたしましたが、卒論で対象とした『異邦人』に引きつけられた理由はそれとは異なります。最初は、イメージによる不条理の提示 (= 太陽の下での殺人) に衝撃を覚えました。何度か読み返すうちに、作品の芸術的な完成度の高さに魅了されるようになりました。2010年段階で、単独で『異邦人』を論じたものが八編、『異邦人』に言及した論文は五編ありましたので、それらを全体に組み込む形で、2010年あたりから、『異邦人』について定年までにまとめようかと思うようになりました。以後、『異邦人』を中心に発信し、定年の年、2016年3月に『「異邦人」研究』として出版いたしました。先ほど、研究対象の設定に関する考え方について苦言を呈しましたが、もう一言申し述べさせていただきますと、『異邦人』に限らず、先行研究を踏まえていない発表、つまり誰が最初に指摘したかについての言及がなされぬままあたかもご自分の着想であるかのような発表が多くなっているのも気にかかっていました。そうした基本的な点には留意し、『異邦人』刊行直後からの先行研究を踏まえたうえで、断るべきところは断り、補足すべきところは補足し、修正すべきところは修正したつもりです。そして、〈定説〉の見直しの必要性の指摘やこれまで問題にされることのなかった諸側面の指摘をとおして、従来の『異邦人』解釈に変更を迫ったつもりです。あわせて、広く一般的には、小説を読み解く面白さの一端を示しえたのではないかと考えております。

以上、著書ならびにいくつかの論文を中心に研究生活を振り返りながらお話ししてきましたが、ここでもう一度、お配りしてあるお手元の資料をご覧ください。全体的に見てみますと、私のささやかな仕事は、専門と一般書とに、というか専門書と非専門書とに、あるいはむしろカミュとカミュ以外とに、という大きく二つに区分されようかと思えます。そしてカミュ関係は、『最初の人間』論と『異邦人』論という二つの著書に収斂していく論考とそれ以外のいくつかの論考という三つのグループに分かれるかと思えます。

カミュ以外につきましては、先ほどお話しいたしました『心の二重性』の中で、

ヴェルコール『二人のカミーユ』、神吉拓郎『私生活』、芥川龍之介『ひよつとこ』、三島由紀夫『仮面の告白』、安部公房『他人の顔』、モリエール『タルチュフ』、スタンダール『赤と黒』、ジッド『田園交響楽』、志賀直哉『小僧の神様』、ステイヴンソン『ジーキル博士とハイド氏』、ドストエフスキー『二重人格』、遠藤周作『スキヤンダル』、カミュ『転落』等、さまざまな文学作品を取りあげ、〈仮面〉〈偽善〉〈分身〉といったテーマについて考察をめぐらせました。

それとは別に、研究論文として三つばかり発信いたしました。「短編小説の新しいかたち — 『号泣する準備はできていた』をテキストとして読む —」（『表現技術研究』創刊号，2004）では、江國香織の直木賞受賞作の斬新な魅力について論を展開させました。2009年には尾道大学（現尾道市立大学）での講演の準備の際に思いついた、藤村『破戒』に認められるヴィニーの影響と改訂版でのその消去の意味を論じました（「藤村『破戒』の初版と改訂版との異同に関する一考察 — 猪子蓮太郎像の造形にみるヴィニーの影響とその消去 —」、『尾道大学日本文学論叢』5号）。また、2013年には、漱石『こころ』についてさまざまな角度から分析してみました（「漱石『こころ』の魅力」、『表現技術研究』8号）。

私が書いたものには必ず目を通してくれる研究仲間からは、藤村『破戒』に関する論考について、「（カミュに関するアプローチと）同じですねえ」と言われたことがあります。他の二編についても、同様のことが認められるかと思えます。フランス文学研究で培ったものは、日本文学研究にも適用できるでしょうし、日本文学プロパーではない者のそのようなアプローチによっても日本文学研究への貢献は可能になるのではなかろうかと考えています。もっとも、根が怠惰な私の場合、(1) 権威ある学会での発表、(2) 権威ある雑誌への掲載、という手順を踏むことはできませんでしたが.....

冷静に考えてみますと、文学研究や文芸批評ができるのも、あと十年か十五年とあったところでしょうか。とはいえ、現役の頃のように、最新の研究動向を追い、そしてそれを踏まえながら仕事をするには困難な状況になりました。今後、カミュについて論文を書くことは、もうないかもしれません。

冒頭で述べましたように、退職後は広く文学に親しみつつ、何か新しいテーマについて考察をめぐらせたいと思っていました。そして、夏の研究会では途中経過についてお話しするつもりでした。打ち明けて申しあげますと、この講演を依頼されたとき脳裏にあったのは、「文学にみる間接的な殺害者たち」というテーマでした。

つまり、殺そうという意識や意図はなかったものの、他者を死に追いやってしまった者たちの系譜、です。漱石『こころ』の先生はその典型的な例となるでしょうし、ラ・ファイエット夫人『クレヴの奥方』のヒロインなども含まれてくるでしょう。カミュの処女作『裏と表』の中や創作ノート of 側面もあった『手帖』の中、さらには『シーシュポスの神話』の中でも繰り返し述べられる、うわの空で話をする「友人」などもその例としてあげられるでしょう。生きていくうえで、他者との接触を回避することはできませんが、「間接的な殺害者」という加害者にならないためには、どのような点に留意しなくてはいけないのかといったことを、文学作品をとおして導き出せないかと思ったのです。

しかし、今回発表させていただいたうえで、このテーマで退職後の仕事のスタートを切ることは、断念いたしました。二つばかり理由があります。一つは、「文学にみる間接的な殺害者たち」の肝心要の結論が、結局のところ、拙著『心の二重性』の終章「もう一人の自分」ですでに述べたことと重なってしまうと判断したからです。引用しておきます。

(.....) 自分では気づかぬままに人を傷つけたり、何気ない言葉に傷つけられるのは、避けようもないことだろう。また、齟齬は不可避免的に生じるものかもしれない。しかし、それらを最小限にくいとめるためには、自己を他者としてチェックするもう一人の自己が必要なのではなからうか？

そのような目を、相手の立場にたって考える態度を、なによりもはぐくんでくれるのが文学であろう。

いま一つの理由としては、「間接的な殺害者たち」よりももっと切実な、本源的な問題を考えるようになったことがあげられます。それは、ありきたりではありますが、生と死の問題です。残念ながら今はまだ発表できる状態にはありませんが、死が待ち受ける人間の条件を支えてくれるものは何かといったことについて考えてみたいと思っています。「生を支えてくれる文学」あるいは「死と向き合う作家たち」といったタイトルになるのでしょうか。モラリスト（モンテーニュ、パスカル、ラ・ロシュフコーなど）の言葉や、行動する作家たち（マルロー、サン＝テグジュペリなど）の作品にはヒントがちりばめられているでしょうが、それ以外にもいろいろな書物に親しみながら、考えをふかめていきたくと思っています。

文学を学び始めた出発点・原点への回帰と言ってもいいかもしれませんが。「いかに十全に生きるか」といったことを、重い主題かもしれませんが、研究者としては

なく文学愛好家として、肩の力を抜いて、のんびり考えていくつもりです。先人の巧みな言葉を引用させていただきます。

わたしだって、できることならものごとについて、より完璧に理解したいと思いはするものの、ものすごく高い代価を支払ってまで買うつもりはない。わたしの腹づもりは、この残りの人生を、気持ちよくすごすことにほかならず、苦勞してすごすことではない。そのためならば、あたまががんがんしたってかまわないようなものなど、もはやなにもない。学問にしても同じで、どんなに価値があっても、そのためにあくせく苦勞するのはごめんこうむりたい。わたしが書物にたいして求めるのは、いわば、まともな暇つぶしアミューズマンによって、自分に喜びを与えたいからにほかならない。勉強するにしても、それは、自己認識を扱う学問を、つまりは、りっぱに生きて、りっぱに死ぬことを教えてくれる学問を求めてのことなのだ。

(宮下志朗編訳『モンテーニュ エッセー抄』、みすず書房)

したがいまして、パスカルの言う « divertissement » (「気晴らし」) はあえて肯定的に捉え、それを忘れず生きていくつもりですし、今夜の懇親会は今から楽しみにしています。

ご静聴、ありがとうございました。